

# 一関学院高

## [6年ぶり5度目の「ウインターカップ」に出場] 女子バスケットボール部

●監督 山田繁 ●主将 小島由希子 ●部員 35人



「第44回全国高校バスケットボール選抜優勝大会岩手県予選」(通称：ウインターカップ)は2013年10月18—20日、花巻市総合体育館で行われ、一関学院が64—57で盛岡白百合学園を下し、6年ぶり5度目の優勝を飾った。

辛勝に小島由希子主将は「仲間を信じて、最後まで気持ちが切れなかった」と話し、「全国は、相手にかかわらず学院らしいプレーで16強を目指す」と表情を引き締めた。山田繁監督は「今年のチームは、理解力や処理能力が高い。短期間で修正できることが特徴」と話し、「目標達成に向け、成功体験の少ない選手のモチベーションを上げられるようサポートしたい」と力を込めた。

走る攻撃と高さを意識したディフェンスを鍛え、挑んだ全国大会は12月23日、東京体育館で行われたが、初戦からV候補の一角札幌山の手(北海道)と対戦し、47—84で敗れた。小島主将は「声を出して連携する学院らしいプレーができなかった」と悔しさをにじませた。初めて全国の壁の厚さを体験した高橋彩さん(2年)は「この悔しさをバネに、新人大大会から県3冠を目指す」と気持ちを切り替え、次のステージを見つめた。



## [19年連続で全国高校駅伝に出場] 男子陸上競技部

●監督 千葉裕司 ●主将 伊藤龍也 ●部員 17人



男子29校、女子19校がたすきをつないだ「男子64回・女子25回全国高校駅伝競走大会岩手県予選」は2013年10月23日、花巻ハーフマラソンコース(7区42.195km)で行われ、男子一関学院が19年連続23回目の優勝を決めた。前回の全国経験者4人を擁する学院は区間賞を総取りする独走。2位に7分以上の大差をつけ、2時間10分10秒で19連覇した。

県高校総体5000mを制したチームの要、伊藤龍也主将は「目標は全国で15位内。京都では、応援してくれる人や一緒に戦った仲間の思いを背負って走る。集大成にしたい」ときっぱり。千葉裕司監督は「伊藤と昆充(3年)のリードを後続がどれだけ守れるかが勝敗の分かれ目」と上位進出に意欲を見せた。

全国大会は12月22日、京都市で行われ、2時間9分14秒でゴール。順位を昨年より10位上げる健闘を見せたが目標には届かなかった。千葉監督は「高速レースの中、前回より順位を上げた選手に感謝している」とねぎらった。伊藤主将は「夢は後輩たちに託し、この経験をこれからの人生に生かしたい」と唇をかんだ。



## [2年連続「春高バレー」に出場]

## 一関修紅高男子バレーボール部

●監督 高橋昇禎 ●主将 今野大成 ●部員 18人



1「第66回全日本バレーボール高等学校選手権大会岩手県予選会」で優勝した一関修紅高 / 2\_12月10日市役所を訪れ、勝部修市長に県大会優勝を報告。全国大会での活躍を誓った / 3「春高バレー」に向け、練習に励む部員。初出場した昨年以上の成績をと周囲の期待も高まる

2013年10月27日、花巻市総合体育館で開かれた「第66回全日本バレーボール高校選手権大会岩手県予選会」(男子)で一関修紅が堂々連覇。昨年に続き「春高バレー」(全国大会)出場を決めた。

決勝は昨年と同じ宿敵不来方との顔合わせとなった。第1・2セットは一関修紅が高いブロックで不来方の攻撃を阻み、速攻とレフトからの攻撃で得点を重ね、共に25—19で連取した。

第3セットは、多彩なトスワークで反撃に転じた不来方に19—25で奪われた。セットカウント2—1で迎えた第4セット、修紅は勝負に出る。レフト攻撃から確実に得点を重ねる。高さのあるブロックで不来方の攻撃を封じる。25—13で第4セットを奪い返し、セットカウント3—1で頂上決戦を制し、2年連続の春高切符を手にした。

同校は、7度のインターハイ出場を誇る古豪。近年、部員不足などから休部に追い込まれる危機もあったが、高橋昇禎監督が赴任して再び強豪校に押し上げた。その道のりは険しく、昨年の春高バレー出場を決めるまでは、なかなか「県4強の壁」を破ることができず、10回連続3位にとどまった。

4強の壁を破ったのは、高橋監督

の冷静な分析・指導と選手たちの「もう負けたくない」という強い気持ちだった。努力は実り、昨年ついに悲願の春高出場を果たした。さらに、昨夏のインターハイでは、予選リーグを突破して決勝トーナメント2回戦まで進んでいる。

2度目の春高は1月5日、「東京体育館」で開幕。初戦の相手は強豪荏田(神奈川)。試合前、今野大成主将(3年)は「初戦を突破して、2回戦でV候補の星城(愛知)と戦いたい。仕上がりの目安はベスト4」と力を込めた。高橋監督も「今年のチームはセンスも高さもある。選手のモチベーションをキープできれば勝機はある」と静かに闘志を燃やした。

こうして臨んだ初戦。第1セット序盤、修紅がエース西村のレフト攻撃を中心に得点を重ねれば、荏田も高さを生かしたスパイクで反撃、一進一退の息詰まる攻防が続いた。しかし、中盤以降、西村が複数枚のブロックに阻まれ、16—25で第1セットを落とし、第2セットは、連係ミス突かれて序盤から1—6とリードを許す苦しい展開に。修紅は、中盤から息を吹き返して追撃したが、その差を詰めることはできず18—25で敗れた。

最後まで粘りのバレーを見せた修紅だが、持ち前のコンビバレーを發揮できず初戦で涙をのんだ。